

29 愚公、山を移す

昔中国の河陽村に、愚公というもう九十才になる老人が住んでいました。

愚公というのは「馬鹿者」という意味なので村人は陰では、みんなこの変な名前のことを笑いあっていました。

この河陽村の南には「大難儀山」と「天屋根山」という大きな二つの山がありました。

この二つの山はエベレスト山を十個ばかり積み上げて、まだそれより高い程の山でしたので、村の人たちは不便でしょうがありませんでした。

なにしろ、この二つの山のせいで、村は昼になっても真つ暗のまま。他の村にも行けないのです。

村の人たちは寄るとさわると、こんな山なんてなければいいのにと、不平を言っていました。

でも、どうすればいいかということになると、誰にもいい知恵は浮かびません。

ある日、愚公は自分の家族を集めて相談しました。「どうだろう。これからみんな、あの山を切り崩そうじゃないか。そうすれば南にある『予州』や『揚子江』にだって簡単に行けるようになるんだが」

それを聞いて、子供や孫たちはみんな即座に賛成しました。

だつて、予州は桃や西瓜が山ほどとれるし、揚子江では舟遊ふなびや、水浴びが出来るのです。もし自由に行き来が出来るとなったら、こんな楽しいことはありません。

翌日さっそくから早速一家総出そつででの作業が始まりました。

つるはしで石を突き崩し、スコップで土を掘り出すので、そうして掘り出した土は、遠く渤海ほっかいのほとりにまで捨てに行きます。

村の人たちは、こんな愚公一家を見て、また嘲りあざけ笑つて言います。

「あんなことをしたつて、山のほんな一部だつて動かすことは出来やしないのに。第一あのじいさんときたら、自分があと何年生きられると思つているんだらう。本当にあの愚公は名前どりの大馬鹿者だよ。」

愚公はそうした悪口を聞くと、決まつて溜め息をついて言うのでした。

「やれやれ。馬鹿はどっちの方かな。わしが死んでも子供は倍になつて残る。その子供が死んでも孫はさらに倍になつて残る。その孫にもやがて子ができ、孫ができていく。」

山がどんなに大きかろうと、その大きさには限りがある。一方、山を崩す人間の方は限りなく増えていくんじゃない。そうなれば、しまいにはどうなるか。そんな簡単な

理屈も分からんのか。世間の馬鹿はどうしようもないの
う。」

なるほど、そう言われれば愚公の言うことも、もっと
もです。それに何より、山がなくなれば一番助かるのは
村人自身なのです。こうして悪口を言う人は、一人二人
と減っていき、中には愚公の仕事を手伝うものさえ出て
きました。

そうして、ある日のこと・・・

問 この物語はこのあと、どうなるでしょうか。

みなさんで、この先を続けて物語を完成させて
下さい。